

おくゆめ

空間に宿る記憶の研究
Pursuit of Memory Dwelling in Space

記憶は、明確に思い出された瞬間にのみ存在するものではない。
それはしばしば、思い出される以前、あるいは忘れきられる直前の、名づけることのできない状態として、私たちの内側や周囲に滞留している。
「おくゆめ」は、そうした記憶の状態を、空間として立ち上げようとする試みである。

空間の中心には、浅い水盤が置かれている。水面には文字が浮かび、それらは確かに読むことができる。しかし同時に、その倒影は水の揺らぎによって歪み、意味を定着させる前に輪郭を失っていく。ここでは、明瞭であることと曖昧であることが対立するのではなく、同時に存在し、互いを侵食し合う。

水中の文字は、ひとりの語り手による内省的な記述ではない。
その半分は、複数の人々から収集された夢の内容を整理・要約し、共通する像として再構成したものである。もう半分は、それぞれが自身の夢について語った感覚や情緒、言葉になりきらない余韻から抽出された。これらの文字は、特定の個人へと回収されることなく、個人と個人のあいだを漂う、匿名的な記憶の層を形成している。

空間は、半透明の布によって緩やかに囲われている。観客は布の隙間から内部を覗き込み、あるいは身体を差し入れるようにして中へと進む。内側では外部の情報が大きく削ぎ落とされ、視野に浮かび上がるのは、ほとんど自分自身の姿だけである。しかし時折、別のスリットから他者の影や輪郭が重なり、その存在が一瞬、視界に侵入する。それは演出された出会いではなく、観客同士の動きによって偶然生じる交差である。この偶発的な重なりが、個人的な記憶と他者の存在とが溶け合う瞬間を生み出す。

半透明の布に囲まれた空間は、外と内、自己と他者、現実と記憶といった境界を明確に分けることなく、それらを緩やかに曖昧化していく。視界は常に制限され、見ることのできる範囲は断片的に切り取られる。観客は「すべてを見る」ことができないまま、その不完全な状態の中に身を置くことになる。この限定された視界は、情報を欠落させるためのものではない。むしろ、観客自身の内側に眠る記憶や感覚を、静かに呼び覚ますための条件として機能している。

おくゆめ

空間に宿る記憶の研究
Pursuit of Memory Dwelling in Space

布に触れる。
視界が細く切られ、光がやわらかく滲む。

内側に入ると、音が少し遠ざかり、
自分の輪郭だけが水面に近づいてくる。
文字は読めるはずなのに、
その影は揺れ、すぐに形を失う。

しばらくすると、
自分以外の気配が、
影として、あるいは動きとして、
視界の端に滑り込んでくる。

それが誰なのかを確かめる前に、
すでに消えている。

見ることは続くが、
焦点は定まらない。
はっきりしたものと、
曖昧なものが、同じ距離にある。

時間が伸び、
水が揺れ、
言葉は意味になる手前で留まる。

ここでは、
思い出そうとしなくても、
何かが浮かび、
何かが沈んでいく。

それが記憶なのか、
ただの感覚なのかは、
最後まで分からない。